

身近な自然の変化と地球温暖化

多摩森林科学園長 三輪 雄四郎



今年(2004年)は日本全国で沢山の台風が上陸した。多摩森林科学園には、急峻な土地に多数の貴重なサクラが植えられているので毎年台風には気を遣っている。今年の上陸数は10個と今までの記録6個を大幅に上回った。幸いなことに科学園では、樹木園の木が数本倒れただけで大きな被害も無くすんだ。ところで、今年の異常な台風の上陸数を地球温暖化と結びつける話が多く見られる。しかし、今年(2004年)の台風の発生数は平年に比べて決して多くないようである。地球温暖化による台風の発生予測モデルによれば温暖化によって発生数は減少するが、台風の勢力が強まる可能性があるといわれている。となればアメリカで今年発生した巨大ハリケーンによる大きな被害はまさに温暖化の結果なのだろうか。

もう一つ温暖化との関係で取りざたされているのが、動植物の動向である。チョウの世界ではいくつかの種類で温暖化と北上の関係が話題になっている。そのなかでクロコノマチョウは、本来熱帯から西南日本にかけての森林に生息し、10年前には関東ではほとんど見られなかったが、今では科学園内で普通に見られるようになっていいる。また、同じく暖地性のツマグロヒョウモンも7、8年前までは関東ではほとんど見られなかった。このチョウは森林に生息するチョウではなく、スミレを食草にしており、花壇や庭に植えられているビオラやパンジーなども好物なので、今では東京や横浜などでは住宅地や公園でも見られるようになった。本種は科学園でもサクラ保存林や苗畑に時折飛来しており、タチツボスミレに産卵しているところも観察されている。神奈川県や山梨県では急速に増加しているようであり、科学園でも今後ますます見かける機会が多くなるのではないかと思われる。

それよりも、科学園でもっとも気になるのはサクラの開花時期である。各地のサクラの開花が早くなり、温暖化との関係が注目されている。確かにここ数年早くなる傾向にあり、2002年、2004年では特に早まった。サクラの開花には2、3月の気温も重要であるが、冬の低温もまた重要である。前年の夏に形成されたサクラの花のつぼみは秋になると休眠に入り、冬にある一定の寒さにさらされないと覚醒しないという現象がある。暖かい鹿児島でも東京よりソメイヨシノの開花が遅くなることのあることや、冬でも暖かい沖縄のカンヒザクラの開花には寒くなる時期が決め手となり、標高の高いところのほうが低いところよりも早く咲き始めるなどというのもこの現象が原因である。したがって、サクラの開花時期は複雑であり、簡単に温暖化と結びつけるのは早計かもしれないが、関東のサクラに関して言えば春の温度の上昇がそのまま開花時期を早めているようである。

ある自然現象を地球温暖化と結びつけるには長期の観測が必要であり、その年その年の現象で一喜一憂することもないかもしれない。しかし、科学園で自然に接していると、温暖化と結びつけて納得してしまうような変化が起こっていると感ずることが多くなった。サクラの時期だけでなく、このような四季折々の変化を体験するためにも、多摩森林科学園に足を伸ばしてみませんか。